

# 中学校社会科地理的分野における「身近な地域」の学習

——まちづくりの視点からみた社会参加型学習の試み——

\*松岡 尚敏・\*\*佐藤 誠希

Teaching Plan on Geographical Studies for Learning Proximate Regions in Junior High School

MATSUOKA Naotoshi, SATOU Seiki

## 要 旨

本研究は、平成20年に告示された中学校学習指導要領の社会科において、授業改善の基本方針のひとつとして「社会参画」の視点を取り入れられたことを受けて、地理的分野における「身近な地域」の学習を例として、「社会参画」の視点を取り入れた指導計画試案の作成を試みたものである。

すなわち、地理的分野における「身近な地域」の学習において、「地域の課題を見だし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養う」という学習指導要領の記述に注目し、仙台市の交通問題を、城下町という都市の地形的特色や住宅地開発と関連づけながら取り扱った。その際に、今後のまちづくりの視点から指導計画試案を構想するとともに、社会参加型の学習活動を組み込んだ授業実践を試みた。

**Key words：** 中学校社会科  
地理的分野  
身近な地域  
社会参画

## はじめに

本稿は、科学研究費基盤研究「持続発展教育のための小中学校『社会科』の学力に関する研究」の一環として行われている、中学校社会科の授業開発に関するプロジェクト研究の成果の一部をまとめたものである。このプロジェクト研究では、平成22年度から23年度までの2年間にわたって、地理授業開発部門と歴史授業開発部門との授業研究を同時並行的にすすめてきた。歴史授業開発部門における授業研究の成果については昨年度まとめているが、本稿はその姉妹編にあたるものである。

地理授業開発部門の研究テーマとしては、「まちづくりの視点からみた『身近な地域』の学習——地理的分野における社会参画の試み——」を設定した。こうしたテーマを設定した理由は、平成20年1月にとりまとめられた中央教育審議会答申の中で、社会科の授業改善の基本方針のひとつとして、「公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する方向で改善を図る」という指摘がなされたことが直接の契機であった。この指摘に対応する形で、中学校社会科地理的分野における「身近な地域の調査」という項目において、「地域の課題を見だし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養う」といっ

\* 宮城教育大学社会科教育講座

\*\* 宮城教育大学附属中学校

た「社会参画」の視点が新たに取り入れられている。

こうした動向に配慮し、教育を通して持続可能な社会の実現を目指す際には、児童・生徒に「社会参画力」を育成していくことが大切であると考え、授業研究を進めていくこととした。

なお、このプロジェクト研究（地理授業開発部門）を進めていくにあたって、宮城教育大学教育学部の社会科教育講座に所属する地理学研究者（自然地理学および人文地理学）、教育学研究者（社会科教育学）と、宮城教育大学附属中学校の社会科研究部に所属する3名の中学校教師との三者（計6名）が協働して取り組んだ。1年目の平成22年度においては、主に理論面での考察をおこなった。すなわち、仙台という都市の特色と課題についての考察、および「身近な地域」の学習と社会参加型学習に関する先行研究の検討をおこなった。また、2年目の平成23年度においては、そうした検討を基にしながら、指導計画の作成に取り組み、平成24年2月～3月にかけて、宮城教育大学附属中学校において授業実践をおこなった。

そこで、本稿では、次の三つの事柄について順次まとめていくこととする。まず、平成20年に告示された『中学校学習指導要領』および『同解説 社会編』を基にしながら、「身近な地域の調査」という項目の趣旨および指導計画を設計する際の留意点などについてどのような指摘がなされているのか整理してみた。次に、社会参加型の学習活動を組み込んだ全8時間扱いの単元指導計画の構想についてまとめてみた。さらにその後、構想した単元指導計画と実際の授業実践とのズレにも触れながら、授業実践の実際について記した。なお、本稿では、仙台という都市の特色については、授業の中で提示した資料との関連で簡単に触れる程度にとどめ、その詳細については記述しなかったことを予めお断りしておきたい。

## 1. 地理的分野における「身近な地域」の学習

### (1) 新学習指導要領（平成20年版）における地理的分野の「身近な地域の調査」

地理的分野においては、これまでも学習内容のひとつとして、「身近な地域」についての学習が一貫して取り上げられてきている。しかし、平成20年3月に改訂された新学習指導要領においては、この「身近な地域」

の学習のねらいに関して、大きな転換がみられる。すなわち、「公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成する」という「社会参画」の視点が、そのねらいの中に明確に位置づけられたのである。こうした改訂は、2006年12月に改正された教育基本法の第2条（教育の目標）、および2007年6月に改正された学校教育法の第21条（義務教育の目標）の中で、「公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」という文言が盛り込まれたという動向を受けたものである。

「社会参画」という視点は、「習得」「活用」「探究」と並んで、社会科・地理歴史科・公民科の改善の基本方針を方向付けるキーワードのひとつである。そして、中学校社会科地理的分野においては、上述したように、内容(2)のエ「身近な地域の調査」という中項目において、この「社会参画」の視点から、下記の下線部の記述が追加されたのである。

#### エ 身近な地域の調査

身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めて地域の課題を見だし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養うとともに、市町村規模の地域の調査を行う際の視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる。

下線を付した部分が、「社会参画」の視点を直接的に反映している文章である。なお、学習指導要領では、この、内容(2)のエ「身近な地域の調査」に対応した内容の取り扱い(4)のエにおいて、次のような留意点を指摘している。

エ エについては、学校所在地の事情を踏まえて観察や調査を指導計画に位置付け実施すること。その際、縮尺の大きな地図や統計その他の資料に親しませ、それらの活用の技能を高めるようにすること。また、観察や調査の結果をまとめる際には、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動を充実させること。（後略）

## (2) 単元指導計画設計上の留意点

以下においては、この「身近な地域の調査」の単元指導計画を設計する際の留意点について、『中学校学習指導要領解説 社会編』での解説文にも適宜言及しながら、①学習の目標（ねらい）の観点、②学習内容の観点、③学習活動の観点の3つのそれぞれから検討していきたい。

### ①学習の目標（ねらい）の観点から

学習の目標（ねらい）の観点からは、前述したように、社会参画の視点が入り入れられていることに留意する必要がある。すなわち、「地域の変容をとらえ、地域の課題や将来像について考える」ための学習活動を充実させることが求められている。具体的には、探究型学習として単元指導計画を設計する際に、単元の学習課題は、事実認識や関係認識に止まるタイプのものではなく、それらを基にしながら、価値分析能力や意思決定能力を含む価値認識にまで発展するタイプのものが求められる。したがって、「何がどこにあるか」「どのように分布しているのか」といった事実認識に対応したタイプの学習課題や、「なぜ、そのように立地しているのか」といった関係認識に対応したタイプの学習課題はふさわしくない。そういったタイプの学習課題ではなく、「なぜ、それが善いのか（悪いのか）＝それはどんな意味・意義をもっているのだろうか」といった価値分析型の学習課題、あるいは、「どうすべきなのだろうか」といった望ましい解決策を複数の選択肢の中から選択・決定するといった意思決定型の学習課題の設定が望まれるのである。換言すれば、生徒が生活舞台にしている身近な地域がかかえている課題を見だし、その地域課題に対する解決策を自分なりに選択・決定していくといった資質・能力の育成を実現するような学習が求められているのである。

### ②学習内容の観点から

次に、学習内容の観点からは、上記した「地域の課題」に関する様々な社会的事象を学習内容として積極的に取り上げることが重要である。その際に、地理的分野の学習であることを考慮し、「位置や空間的な広がりとかかわり度ととらえる地理的事象に関する地域の課題」を扱い、「地方財政などの公民的分野の学習内容に関する地域の課題」とは区別して扱うことに留意する必要があると指摘されている。また、地域の課題の選定にあたっては、生徒が具体的に実感でき興味・関

心の持てる課題であることは無論大切であるが、それとともに、当該地域の住民の間で共通に課題として意識されている事象を取り上げることが重要である。

### ③学習活動の観点から

続いて、学習活動の観点から、留意点を検討してみると、まず、「観察や調査などの活動を行い」とあるように、野外での観察や地域調査を積極的に導入し、それらの学習活動を指導計画にしっかりと位置付けて実施することの重要性が指摘されている。なお、野外での観察や地域調査には、学習課題を見いだすためのものと、追究した結論を検証・確認するためのものとの2つが考えられる。次に、「縮尺の大きな地図や統計その他の資料に親しませ、それらの活用の技能を高めるようにする」とあるように、地図をはじめとした資料の活用技能を高めるための学習活動が重視されている。特に、地図の読図や作図などの学習活動を、言語活動の充実に資するものとして積極的に取り入れることが指摘されている点が特色である。さらに、上記の2つの点とも重なるが、「観察や調査の結果をまとめる際には、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動を充実させる」とあるように、地理的分野においても、歴史的分野や公民的分野と同様に、「説明」「解釈」「論述」「意見交換」といった言語活動に関する学習活動の充実に配慮することが強調されている。その際に、「観察や調査結果をまとめたり発表したりする際には、観察や調査結果だけではなく、観察や調査結果を基に各自が解釈をすることを重視する観点から、結果を根拠に合理的な解釈になるよう意見交換しながら、多面的・多角的に追究したことがわかるようなまとめ方や表現の方法を工夫することが大切」であり、「発表や論述する場合においては、調査結果から読み取れた事実なのか、それに基づいた自分の解釈なのかが明確に区別できるように表現する必要がある」と指摘されていることからわかるように、社会認識における「事実認識」と「関係認識」「価値認識」との違いを教師側も明確に意識した上で、生徒に学習活動をさせることが求められている。

### (3) 公民的資質としての「社会参画力」

前述した通り、新学習指導要領（平成20年版）における地理的分野の「身近な地域の調査」においては、

「公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成する」という「社会参画」の視点が、そのねらいの中に明確に位置づけられたところに特徴がある。この「公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力」という文言は、平成20年1月に取りまとめられた中央教育審議会答申における社会科・地理歴史科・公民科の改善の基本方針の中で使われているものである。同答申の社会科・地理歴史科・公民科の改善の具体的事項における小学校、中学校公民的分野、高等学校公民科に関する文章の中では、「よりよい社会の形成に参画する資質や能力」や「よりよい社会の形成に自ら参画していく資質や能力」という文言が使われている。こうした「公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力」「よりよい社会の形成に参画する資質や能力」および「よりよい社会の形成に自ら参画していく資質や能力」について、今、「社会参画力」と呼ぶならば、その「社会参画力」とは具体的にどのような資質や能力を指すと考えればよいのであろうか。

これまでの社会科教育学研究の先行研究を参考にしながら、筆者なりの結論を先に述べるならば、「社会参画力」とは、狭義の公民的資質を指すとともに、社会認識とセットになって広義の公民的資質を形成する資質や能力のことである。そして、こうした資質や能力は、学習活動の側面而言えば、Doの問いの追究およびWhichの問いの追究を通して育成されるものである。

これらをまとめたものが、表1である。なお、「社会参画力」は、直接的に社会参加する際の能力としての

「社会参加力」と、間接的に社会参加する際の能力としての「意思決定力」との2つの能力を総合したものとしてとらえている。

## 2. 「身近な地域の調査－仙台の交通問題」試案

### (1) 社会参加型社会科授業論の特徴

「身近な地域の調査」の単元を構想するにあたって、「社会参画」の視点到配慮し、「社会参画力」を育成していくために、社会参加型社会科授業論の先行研究を参考にした。その際に、唐木(2006)が提唱している社会参加学習における問題解決プロセスを基本にしなが、単元設計を試みた。その問題解決プロセスとは、「Ⅰ. 問題把握」→「Ⅱ. 問題分析」→「Ⅲ. 意思決定」→「Ⅳ. 提案・参加」という4つの学習段階から構成されるものである。

まず、「Ⅰ. 問題把握」の学習段階は事実認識が中心となる段階であり、身近な地域社会が具体的にどのような課題に直面しているのか(地域住民がどのような課題意識を持っているのか)について、知ったりわかったりするための学習活動を行う段階である。すなわち、学習課題而言えば、Whatの問いおよびHowの問いを追究することが中心となる。次に、「Ⅱ. 問題分析」の学習段階は関係認識が中心となる段階であり、そうした地域課題はなぜ起っているのか、あるいはそうした地域課題が地域住民の生活にどのような影響を与えるのかについて、社会的事象間の関係を説明す

表1 学習活動と学力の類型

社会認識と公民的資質		問いと学習活動	育成される知識・能力		
広義の公民的資質	狭義の公民的資質	社会的実践 (参画すること－直接的に社会参加すること)	Doの問いの追究：何をするかと問い、実際に社会と関わる学習活動	社会参加力	社会参画力
		意思決定 (参画すること－間接的に社会参加すること)	Whichの問いの追究：どうすべきかと問い、望ましい社会的行為を選択・決定する学習活動	意思決定力	
	社会認識	価値認識 (判断すること)	Whyの問いの追究：なぜ善いのか(悪いのか)と問い、社会的事象の意味・意義を解釈する学習活動	価値分析力	
		関係認識 (思考すること)	Whyの問いの追究：なぜなのかと問い、社会的事象間の関係を説明する学習活動	科学的説明力	
		事実認識 (わかること)	Howの問いの追究：どのようにと問い、社会的事象の構造や過程を調べまとめる学習活動	概念的知識	
			(知ること)	Whatの問いの追究：何がと問い、社会的事象に関する個別の情報を求める学習活動	記述的知識

るための学習活動を行う段階である。学習課題で言えば、Whyの問いを追究することが学習活動の中心となる。続いて、「Ⅲ. 意思決定」の学習段階では、地域課題の解決に向けて立案・実施されている複数の公共政策の社会的意義や有効性をめぐって意思決定するための学習活動を行う。すなわち、行政や様々な市民団体が立案・実施している複数の公共政策のそれぞれについて、そのメリットおよびデメリットや、実現可能性、費用対効果から見た有効性などを考慮に入れながら、最も望ましい社会的行為を選択・決定するための学習活動を行う段階である。この段階では、学習課題で言えば、Whichの問いを追究することが学習活動の中心となる。その後、「Ⅳ. 提案・参加」の学習段階で、それまでの学習成果を総動員しながら、社会参加活動を行うことになる。すなわち、児童・生徒自らが行政や市民団体に対して提案したり、多くの地域住民に向けてメッセージを発信したり、場合によっては、行政や市民団体と協力しながら実際に行動を起こしたりという学習活動を行う。学習課題で言えば、Doの問いを追究する学習活動へと進むことになる。なお、理想としては、「Ⅳ. 提案・参加」の学習段階の後で、振り返り活動を十分に行うことが大切である。すなわち、児童・生徒が自分たちの実際に行った社会参加活動が、地域課題を解決することに本当に役立ったかどうか、評価する活動が設定できれば理想であろう。つまり、一連の問題解決プロセスは、「Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳ」と単線的に実施されるのではなく、「Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳ→Ⅰ→Ⅱ→・・・」と循環的に実施されることが理想であるが、現実にはなかなか難しいと思われる。

以上のように、社会参加型社会科授業論の特徴は、広義の公的資質に関わるすべての学習活動を順次踏みながら、最終的に狭義の公的資質としての「社会参画力」の育成をめざしているところにある。換言すれば、Doの問いの追究に向けて、Whatの問いおよびHowの問いを追究する学習活動、Whyの問いを追究する学習活動、Whichの問いを追究する学習活動を連続的に配置して単元全体の指導計画を設計しようとするところに、その特徴があると言える。

## (2) 身近な地域の調査 単元指導計画 試案

上述した社会参加型社会科授業論の問題解決プロセスを基にしながら、「身近な地域の調査——仙台市の交

通問題——」という全8時間扱いの単元として構想してみたものが〈資料1〉である。学習内容としては、仙台市が他の政令指定都市と比較してみた場合に、移動手段として自動車への依存度が高い都市であるということ、および市中心部での交通渋滞が激しい都市であるという特徴に着目し、交通問題、中でも道路の渋滞問題に焦点をあてて取り上げてみた。

「Ⅰ. 問題把握」の学習段階に相当しているのが第2時および第3時の2時間である。この学習段階では、仙台市の主要な道路網についてとらえさせるとともに、仙台市が実施した交差点交通量調査を基にしながら、交通渋滞の現状およびその特徴について理解させることをねらっている。次いで、「Ⅱ. 問題分析」の学習段階に相当しているのが第4時である。「仙台市内の中心部周辺では、なぜ慢性的な交通渋滞が発生するのだろうか」という学習課題を設定し、仙台市の交通渋滞の原因について、戦後における住宅地開発の特徴と城下町という地形上の特徴とを関連づけながら追究させている。その後の、現地調査を間にはさんだ第5時および第6時の2時間が、「Ⅲ. 意思決定」の学習段階に相当している。「仙台市や宮城県が取り組もうとしている交通政策は、本当に有効なのだろうか」という学習課題の追究に向けて、行政が取り組んでいる交通政策の有効性と問題点について考えさせている。その際に、第4時までの学習の成果を活用させながら、道路建設や交差点改良といったハード面での交通政策、信号機の制御や渋滞情報の提供などソフト面での交通政策、パーク&ライドや公共交通機関との接続システムの整備といった第3の交通政策という3つの側面から総合的に考えさせるように留意している。さらに、「Ⅳ. 提案・参加」の学習段階に相当しているのが第7時および第8時の2時間である。この学習段階では、「交通渋滞を解消するためには、今後の仙台市の交通政策はどうあるべきだろうか」という学習課題に対する自分たちの意見を「市民の投書」として、市役所に提言することをめざしている。

### (3) 身近な地域の調査 本時の指導過程 試案

上記の単元指導計画に従って、宮城教育大学附属中学校において、平成24年2月下旬から3月上旬の時期にかけて、第2学年の4クラスで実際に授業を実践していただいた。授業者は、第2学年の社会科授業をそ

## &lt;資料1&gt; 身近な地域の調査 単元指導計画 試案

	本時のねらい・学習課題	教師の働きかけ
導入	<p>【第1時】 東日本大震災における仙台の被害状況の概要を知ることによって、インフラの重要性に目を向けさせる。</p> <p>東日本大震災直後の仙台市内の様子はどうだったのだろうか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東日本大震災における仙台市内の被害状況に関する資料を提示する。</li> <li>・市内中心部におけるライフラインの不通状況と関連させながら、インフラの場所および被害状況を地図で確認させる。</li> <li>・公共交通機関の不通状況と関連させながら、インフラとしての鉄道や道路の重要性に目を向けさせる。</li> </ul>
問題把握	<p>【第2時】 災害時以外における仙台市内の交通渋滞の現状および仙台市内の主要な道路網についてとらえさせる。</p> <p>仙台市では、いつどこで交通渋滞が発生しているのだろうか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仙台市内の道路網の概要について説明する。</li> <li>・仙台市内の主要な道路網について、地図で確認させる。</li> <li>・朝の通勤・通学時間帯において、交通渋滞が激しい場所を地図に書き込ませる。</li> </ul>
	<p>【第3時】 仙台市の交差点交通量調査の結果を基にしながら、仙台市内の交通渋滞に関する特徴についてとらえさせる。</p> <p>仙台市の中心部周辺での交通量についてはどのような特徴がみられるのだろうか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仙台市内における主要な交通渋滞場所について、朝と夕方時間帯における交通量の違いに気づかせる。</li> <li>・仙台市の交通量に関する特徴をまとめさせるとともに、交通渋滞の状況との関連をとらえさせる。</li> </ul>
問題分析	<p>【第4時】 仙台市内の交通渋滞の原因について、住宅地開発や都市構造(城下町)と関連づけながらとらえさせる。</p> <p>仙台市の中心部周辺では、なぜ慢性的な交通渋滞が発生するのだろうか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の地図と60年前の地図とを比較させることによって、郊外の住宅地と市中心部との結びつきに気づかせる。</li> <li>・バス路線を参考にしながら、東西南北における中心部への出入口の場所について、地形と関連させながらとらえさせる。</li> </ul>
意思決定	<p>【第5時】 仙台市や宮城県が取り組んでいる交通政策について、ハードな側面とソフトな側面との両面から総合的にとらえさせる。</p> <p>仙台市や宮城県は、交通政策にどのように取り組もうとしているのだろうか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仙台市における都市計画道路の整備計画およびその進捗状況について確認させる。</li> <li>・交通管制センターにおける交通管制システムについてとらえさせる。</li> <li>・自家用車の依存度の問題と関連させながら、仙台市における将来の交通政策の基本的な考え方について理解させる。</li> </ul>
	<p>グループ毎に、時間帯・場所を担当し、附属中学校周辺の上杉地区において、適宜現地調査を実施する。</p> <p>【第6時】 仙台市や宮城県が取り組もうとしている交通政策の有効性と問題点について、根拠となる事実を基にしながら考えさせる。</p> <p>仙台市や宮城県が取り組もうとしている交通政策は、本当に有効なのだろうか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループが調査した結果を取りまとめ、それらを地図上に記入させるとともに、その地図を見て気づいたことを発表させる。</li> <li>・上杉地区周辺での調査結果とも照らし合わせながら、仙台市内の他の地区での状況にも目を向けさせる。</li> <li>・仙台市が取り組もうとしている交通政策の有効性と問題点について検証させる。</li> </ul>
社会参加	<p>【第7時】 前時までの学習成果を活用させながら、今後における仙台市の交通政策について自分なりのプランまとめさせる。</p> <p>交通渋滞を解消するためには、今後の仙台市の交通政策はどうすべきだろうか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・有効性や問題点の指摘について、論点を整理させる。</li> <li>・それぞれの問題点について、その原因がどこにあるのかに着目させながら、解決策を考えさせる。</li> <li>・提案された解決策のそれぞれについて、重要度や緊急度の視点から、優先順位を付けさせる。</li> </ul>
	<p>【第8時】 市役所に提言するプランの原案を作成させる。</p> <p>自分たちの意見を「市民の投書」として、市役所に提言してみよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・提案書のタイトルおよび見出しを考えさせる。</li> <li>・それぞれの見出しごとに、記述したい内容を焦点化させる。</li> <li>・クラスとしての統一案を検討させる。</li> </ul>
	実際の報告書の作成や市役所への提出については、総合的な学習の時間などを活用して活動を行う。	

<資料2> 身近な地域の調査 本時の指導過程 試案

【第1時】

- (1) 本時のねらい  
東日本大震災における仙台の被害状況の概要を知ることによって、インフラの重要性に目を向けさせる。
- (2) 指導過程

教師の働きかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点・資料
1. 3月12日の新聞記事を提示し、東日本大震災に目を向けさせる。	・東日本大震災の時の新聞だ。 ・あれからもう1年が経つのだなあ。	1. 日時、県内各地の震度や被害者数などを確認させる。【資料1-1】
東日本大震災直後の仙台市内の様子はどうだったのだろうか		
2. 東日本大震災における仙台市内の被害状況に関する資料を提示する。	・それぞれの場所は、仙台市内のどのあたりなのだろうか。 ・被害と言っても、場所によって違いがある。 ・いずれの被害も、その場所で暮らしていた人々に大きな影響を与えている。	2. 沿岸部における津波被害、丘陵地における地滑り被害、東部低地における建物被害の3つに関する資料を提示し、被害状況の概要について確認させる。 【資料1-2】【資料1-3】 【資料1-4】
3. 仙台市内中心部（上杉地区など）におけるライフラインの不通状況と関連させながら、インフラの場所および被害状況を地図で確認させる。	・沿岸部の施設は、津波によって施設自体が大きく損壊している。 ・上水道については、浄水場の設備だけでなく、水道管にも大きな被害が与えられている。	3. インフラとしては、新仙台火力発電所、仙台市ガス局港工場、安養寺配水所などに着目させ、津波の浸水地域や地震の被害状況と重ね合わせながら、ライフラインが不通になった原因をとらえさせる。 【資料1-5】【資料1-6】 【資料1-7】【資料1-8】
4. 公共交通機関の不通状況と関連させながら、仙台市においても、震災当日に「帰宅難民」が多数発生したことについて確認させる。	・自宅に帰ることができなかった「帰宅難民」については、首都圏だけでなく、仙台でも起こっていた。 ・附属中学校でも、深夜に帰宅したり、帰宅できずに学校に宿泊せざるを得なかった生徒がいたんだ。	4. 震災当日の附属中学校での状況を思い出させる。できれば、当日帰宅できずに附属中学校に宿泊した生徒および教職員の体験を紹介させる。 【資料1-9】【資料1-10】
5. 「帰宅難民」の発生を切り口としながら、仙台市の交通や道路網に関心をを持たせる。	・交通機関や道路はわれわれの生活にとってとても大切なものなんだ。	5. 交通や道路網の重要性について関心を持たせ、次時につなげる

- (3) 資料  
資料1-1：河北新報社 2011年3月12日付の新聞  
資料1-2：仙台市沿岸部に押し寄せる津波の写真  
資料1-3：仙台市丘陵部における崖崩れ現場の写真  
資料1-4：仙台市東部低地における建物倒壊現場の写真  
資料1-5：5万分の1地形図（生徒配布用）  
資料1-6：新仙台火力発電所の被害状況に関する写真  
資料1-7：仙台市ガス局港工場の被害状況に関する写真  
資料1-8：安養寺配水所の被害状況に関する写真  
資料1-9：震災当日の市内中心部における交通渋滞の写真  
資料1-10：交通機関の不通により混雑する仙台駅前写真

【第2時】

- (1) 本時のねらい  
災害時以外における仙台市内の交通渋滞の現状および仙台市内の主要な道路網についてとらえさせる。
- (2) 指導過程

教師の働きかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点・資料
1. 仙台市の朝の通勤・通学時間帯における交通渋滞の現状に気づかせる。	・朝の時間帯に交通渋滞が起こる場所は、毎日同じ場所だ。 ・中心市街地周辺の郊外で渋滞している。	1. 特定の場所で激しい交通渋滞が慢性的に発生している現状を理解させる。 【資料2-1】
仙台市では、いつどこで交通渋滞が発生しているのだろうか		
2. 仙台市内の道路網の概要について、簡単に説明する。	・いろいろな方向から仙台の中心部に道路が集まってきている。 ・仙台市街地を取り囲む環状道路も造られている。 ・高速道路も整備されてきている。	2. 中心部からの放射状の道路および環状道路が道路網の骨格となっていることを理解させる。 【資料2-2】【資料2-3】 【資料2-4】

3. 仙台市内の主要な道路網について、地図で確認させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主要な道路が東西南北のどの方角からも通じている。</li> <li>・旧道に代わってバイパスが主要道となっている。</li> <li>・まだ、未整備の区間もある。</li> </ul>	3. 中心部からの東西南北への放射状の主要道路各2本を中心に確認させるとともに、8方位の主要道および環状道路については補足説明する程度にとどめる。
4. 朝の通勤・通学時間帯において、交通渋滞が激しい場所を地図に書き込ませる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通渋滞の激しい場所は、郊外の交差点だ。</li> <li>・朝の8時前後頃に一番渋滞が激しくなっている。</li> </ul>	4. 渋滞の場所と方向性に着目させながら地図に記入させる。 【資料2-5】【資料2-6】 【資料2-7】【資料2-8】
5. 交通渋滞の状況をまとめさせた上で、全体の傾向に目を向けさせる。		

(3) 資料

- 資料2-1：朝のテレビ番組における道路交通情報を録画したDVD（異なる曜日の3日分）
- 資料2-2：5万分の1地形図（教師提示用・主要道路をマークした地図）
- 資料2-3：5万分の1地形図縮小コピー（生徒配布用・主要道路をマークした地図縮小コピー）
- 資料2-4：主要道の名称一覧
- 資料2-5：日本道路交通情報センターのホームページにおける渋滞情報に関するリアルタイム画面
- 資料2-6：5万分の1地形図（教師提示用・渋滞交差点をマークした地図）
- 資料2-7：5万分の1地形図縮小コピー（生徒配布用・渋滞交差点をマークした地図縮小コピー）
- 資料2-8：渋滞で有名な交差点の名称一覧

【第3時】

(1) 本時のねらい

仙台市の交差点交通量調査の結果を基にしながら、仙台市内の交通渋滞に関する特徴についてとらえさせる。

(2) 指導過程

教師の働きかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点・資料
1. 前時の学習内容を確認させる。		1. 地図を見ながら、交通渋滞の現状について具体的に思い出させる。
仙台市の中心部周辺での交通量についてはどのような特徴がみられるのだろうか		
2. 仙台市が実施している交差点交通量調査の概要について説明する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3年に1回くらいの間隔で調査している。</li> <li>・最新の調査は、平成20年の調査だ。</li> </ul>	2. 調査の全体像について簡単に説明し、詳細については後で触れるよう伝える。 【資料3-1】
3. 仙台市内における主要な交通渋滞場所について、朝と夕方の時間帯における交通量の違いに気づかせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ平日でも、時間帯によって状況には随分と違いがある。</li> <li>・通過自動車台数の多い方向が時間帯によって違っている。</li> </ul>	3. 昭和町交差点、ガス局前交差点、八幡神社入口交差点の3ヶ所のデータについて読み取らせる。 【資料3-2】【資料3-3】 【資料3-4】
4. 3つの交差点に共通する交通量に関する特徴をまとめさせるとともに、交通渋滞の状況との関連をとらえさせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いずれの交差点も、朝の時間帯は郊外から中心部に向けて入ってくる自動車が多い。</li> <li>・夕方の時間帯は、反対に中心部から郊外に向けて出て行く自動車が多い。</li> </ul>	4. 交差点の場所や、時間帯と方向性の関係などに着目させながら、人の移動に関する共通性をまとめさせる。
6. 交通渋滞の特徴についてまとめさせた上で、渋滞発生の原因に関心を持たせる。		

(3) 資料

- 資料3-1：仙台市交差点交通量調査（平成20年度）に関する資料抜粋
- 資料3-2：昭和町交差点における交差点交通量調査結果（平成20年度）のグラフ
- 資料3-3：ガス局前交差点における交差点交通量調査結果（平成20年度）のグラフ
- 資料3-4：八幡神社入口交差点における交差点交通量調査結果（平成20年度）のグラフ



中学校社会科地理的分野における「身近な地域」の学習

【第4時】

(1) 本時のねらい

仙台市内の交通渋滞の原因について、住宅地開発や都市構造（城下町）と関連づけながらとらえさせる。

(2) 指導過程

教師の働きかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点・資料
1. 前時の学習内容を確認させる。	・通勤・通学による人の移動が交通渋滞に関係しているようだ。	1. 交通渋滞の特徴としてみられた点について確認させる。
仙台市の中心部周辺では、なぜ慢性的な交通渋滞が発生するのだろうか		
2. 現在の地図と60年前の地図とを比較させることによって、郊外の住宅地と中心部との結びつきに気づかせる。	・旧市街地周辺部の丘陵地だった場所に大規模な住宅地を造成している。 ・郊外の住宅地と中心部をつなぐ道路が新たに造られているが、整備が追いついていない面がみられる。	2. 旧市街地の郊外に住宅地が開発されたことによって、郊外の住宅地と中心部との間で人の移動が急増したことをとらえさせる。 【資料4-1】【資料4-2】
3. バス路線図を参考にして、中心部への出入り口が特定の場所に限定されていることに気づかせる。	・北方面からのバス路線はなぜ北仙台付近に集まってくるのだろうか。 ・五橋付近にバス路線が集まってきているのは、広瀬川の橋と関係がありそうだ。	3. 北方面からの出入り口としての北仙台付近、南方面からの出入り口としての五橋付近に着目させる。 【資料4-3】
4. 城下町という都市構造の視点から、北仙台付近および五橋付近の地形的な特徴についてとらえさせる。	・北仙台付近に東西に延びている小高い丘が、その郊外との交通を妨げる原因となっている。 ・広瀬川では中心部と郊外とを結ぶ橋が限られている。	4. 仙台が城下町という元々郊外からの通行を妨げる場所に造られた街であることが、郊外の住宅地と中心部をつなぐ道路建設の障害となっていることをとらえさせる。 【資料4-4】
5. 道路建設の難しさを意識させながら、今後における解決策に目を向けさせる。		5. 道路建設だけでなく、他の解決策についても予想させておく。

(3) 資料

資料4-1：5万分の1地形図コピー（生徒配布用・1950年代の地形図コピー）

資料4-2：5万分の1地形図（教師提示用・中心市街地と郊外の住宅地とをマークした地図）

資料4-3：仙台市交通局「市営バス・地下鉄路線図（平成23年4月1日改正版）」

資料4-4：5万分の1地形図（教師提示用・中心市街地北縁における東西に延びた小高い丘、広瀬川をマークした地図）

【第5時】

(1) 本時のねらい

仙台市や宮城県が取り組んでいる交通政策について、ハードな側面とソフトな側面との両面から総合的にとらえさせる。

(2) 指導過程

教師の働きかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点・資料
1. 県道仙台・大衡線の北山トンネルに関する写真を提示する。	・ここはどこなのだろうか。 ・このトンネルが開通することによって、どことどこが結ばれることになるのだろうか。	1. 仙台市がいろいろな道路の整備に取り組んでいることに目を向けさせる。 【資料5-1】
仙台市や宮城県は、交通政策にどのように取り組もうとしているのだろうか		
2. 仙台市における都市計画道路の整備計画とその進捗状況について確認させる。	・3環状・12放射状道路の整備を目標としている。 ・現在、どこを道路を優先的に整備しようとしているのだろうか。	2. 仙台市の都市計画道路の概要について地図で確認させるとともに、都市計画道路の整備状況をとらえさせる。 【資料5-2】【資料5-3】
3. 宮城県警察交通管制センターにおける交通管制システムについて確認させる。	・信号機を制御することによって、交通渋滞の解消に取り組んでいる。 ・各種の情報板によって、交通情報をドライバーに伝えている。	3. 交通渋滞の解消には、道路の新設・拡幅や交差点の改良工事といったハードな側面に加えて、信号機の制御や渋滞情報の提供などソフトな側面があることに気づかせる。 【資料5-4】【資料5-5】 【資料5-6】【資料5-7】
4. 第3の渋滞解消策としての仙台市の都市交通プランの基本的な考え方について理解させる。	・過度に自家用車に依存しない交通体系をめざしている。 ・鉄道にバスが結節する、公共交通を中心とした交通体系を創ろうとしている。	4. 第3の渋滞解消策として、中心部に入ってくる自動車の総量自体を削減しようとする政策である点をおさえさせる。 【資料5-8】

5. 学習成果を基にしながら、仙台市の交通政策の特徴についてまとめさせる。		5. 教師側が適宜、他の都市や過去と比較した自動車依存度に関する資料を提示しながら、補足説明を加える。 【資料5-9】
---------------------------------------	--	--

(3) 資料

- 資料5-1： 県道仙台・大衡線の北山トンネルに関する写真
- 資料5-2： 河北新報 平成22年6月1日付新聞記事
- 資料5-3： 仙台市「都市計画道路網の見直しによる『新たな幹線道路網（案）』（平成22年6月）の資料抜粋
- 資料5-4： 宮城県警察交通管制センターに関する資料抜粋
- 資料5-5： 交通管制センターの交通情報表示板の写真
- 資料5-6： 財団法人日本交通管理技術協会「信号機なんでも読本（平成21年度版）」の資料抜粋
- 資料5-7： 昭和町交差点における車両感知器の写真、監視用テレビの写真
- 資料5-8： 仙台市「せんだい都市交通プラン」(平成22年11月)の資料抜粋
- 資料5-9： 「第4回仙台都市圏パーソントリップ調査報告書 実態調査編」(平成15年3月)からの統計抜粋

【第6時】

(1) 本時のねらい

仙台市や宮城県が取り組もうとしている交通政策の有効性と問題点について、根拠となる事実を基にしながら考えさせる。

(2) 指導過程

教師の働きかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点・資料
1. 実際に調査してみて感じたことを各自に発表させる。		1. 調査前の予想と調査後の実態とのギャップに着目させながら発表させる。
仙台市や宮城県が取り組もうとしている交通政策は、本当に有効なのだろうか		
2. 各グループが調査した結果をとりまとめ、それらを地図上に記入させる。		2. 時間帯や場所に目させながら、自動車の移動に関する全般的な状況と道路状況とを対比させる。 【資料6-1】
3. 記入した地図を見て気づいたことを発表させる。		3. 発表させる際には、関係する人の立場や生活場面などを焦点化させ、なるべく具体的に考えさせる。
4. 上杉地区周辺での調査結果とも照らし合わせながら、仙台市内の他の地区の状況と比較させる。		4. 他の地区と比較させる際には、共通点と相違点のそれぞれについて押さえさせるとともに、道路だけでなく、鉄道との関係や公共施設・大型病院の場所などにも目を向けさせる。 【資料6-2】
5. 仙台市や宮城県が取り組もうとしている交通政策の有効性について考えさせる。		5. 根拠となる具体的な事実を基にしながら、有効性や問題点について考えさせる。
6. 有効性や問題点の指摘を列挙させながら、多様な視点に目を向けさせる。		6. 指摘された有効性や問題点のそれぞれの関係について意識させながら、他の人の意見を聞かせる。

(3) 資料

- 資料6-1： 各調査地点付近の住宅地図
- 資料6-2： 5万分の1地形図（教師提示用・鉄道や主な公共施設、主な大型病院をマークした地図）

中学校社会科地理的分野における「身近な地域」の学習

【第7時】

(1) 本時のねらい

前時までの学習成果を活用させながら、今後における仙台市の交通政策について自分なりのプランをまとめさせる。

(2) 指導過程

教師の働きかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点・資料
1. 前時で列挙させた有効性や問題点について思い出させる。		
交通渋滞を解消するためには、今後の仙台市の交通政策はどうすべきだろうか		
2. 有効性や問題点の指摘について、論点を整理させる。		2. 問題点については、その原因がどこにあるのかに着目させながら、グループ分けさせる。
3. それぞれの問題点について、その原因がどこにあるのかに着目させながら、解決策を考えさせる。		3. 仙台市の都市計画全体の基本的な考え方や今後の人口予測などとも関連させながら、解決策を考えさせる。
4. 提案された解決策のそれぞれについて、重要度や緊急性の視点から、優先順位を付けさせる。		4. 解決策については、財政上の裏付けや費用対効果の関係などにも考慮させながら、単なる夢物語に終わらない実効性のあるプランとしてまとめさせる。
5. クラスとしての意見をまとめさせる。		5. グループ内で意見交換させた後に、クラス全体での意見交換につなげさせる。
6. クラスとしての意見を簡潔なキーワードとして表現させる。		6. 意見がどうしてもひとつにまとまらなかった場合には、無理にまとめようとせず、両論併記のキーワードで表現させる。

【第8時】

(1) 本時のねらい

市役所に提言するプランの原案を作成させる。

(2) 指導過程

教師の働きかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点・資料
1. 前時に示されたキーワードに込められた意味について、もう一度確認させる。		
自分たちの意見を「市民の声」として、市役所に提案してみよう		
2. 提案書のタイトルおよび見出しを考えさせる。		2. 見出しについては、解決策の優先順位にしたがって、3つ程度（ベスト3）に絞らせる。
3. それぞれの見出し毎に、内容を作成させる。		3. グループ毎で担当を決め、分担しながら内容作成の作業に当たらせる。
4. 作成内容をグループ毎に中間発表させる。		4. 他のグループに対して、適宜修正提案をさせる。
5. 「2年〇組提案書」を原案としてまとめさせる。		
6. 全体の統一性やわかりやすさの視点から、提案書の全体について大観させる。		

の年度担当していた佐藤誠希教諭にお願いした。ちなみに、2年1組を例にとると、8時間の授業日程は次の通りであった。

- 第1時：2月22日（水） 第4校時
- 第2時：2月23日（木） 第1校時
- 第3時：2月27日（月） 第1校時
- 第4時：2月29日（水） 第4校時
- 第5時：3月1日（木） 第1校時
- 第6時：3月5日（月） 第1校時
- 第7時：3月7日（水） 第4校時
- 第8時：3月8日（木） 第1校時

8時間のそれぞれの本時における指導過程の概要をまとめたものが、〈資料2〉である。授業は、概ね単元指導計画で予定されていた指導過程で実践することができた。ただし、諸般の事情により、次の点においては、指導計画の通りには実施できなかった。

- ・第1時および第2時において使用する予定であった映像資料については、視聴覚機器の関係で、実際に提示することができなかった。
- ・第5時と第6時の間において予定していた現地調査については、授業時間の調整および安全面での問題（引率者の確保）のため実施することができなかった。
- ・第8時における市役所に提言するプランの原案を作成させるという社会参加の学習活動については、時間の関係で、原案作成までに至らなかった。

その他、実際に授業実践をおこなってみて、若干の予定変更が必要になった場面も、次の通りいくつかみられた。

- ・第2時における作図の作業が予想以上に時間を要し、「問題把握」の学習段階が当初予定していた第2時・第3時の2時間扱いのところ、結局合計で3時間扱いとなった。
- ・第5時において、仙台市や宮城県が取り組んでいる交通政策について、ハードな側面（道路の建設など）、ソフトな側面（信号の制御など）および第3の側面（過度にクルマに依存しない交通体系への移行）からとらえさせる際に、それぞれに関する資料を読み取らせるための時間が十分に確保できなかった。
- ・上記の変更もあって、第6時において予定していた仙台市や宮城県が取り組んでいる交通政策のそれぞれに対する有効性や問題点を追究する学習活動において、思考の深まりにやや欠ける面がみられた。

なお、各本時の実際については、次節で詳細に触れたい。

### 3. 授業の実際

単元指導計画（身近な地域の調査）では8時間構成になっており、実際に行った各時の学習内容は以下の通りである。

第1時の学習内容として、東日本大震災における仙台市の被害状況の概要を知ることによって、インフラの重要性に目を向けさせるように授業を組み立てた。まず導入として、2011年3月12日付の新聞を提示したところ、生徒たちはほぼ1年前の大きな災害を思い出していた。世界的な自然災害に自分たちが住んでいる身近な地域が関係しているということもあり、大きな反応があった。次に、仙台市の津波の写真、崖崩れの写真、建物の倒壊現場の写真を提示し、被害状況の概要について確認させた。生徒は世界的な震災被害の大きさをあらためて確認し、その場所が身近な地域の仙台市で起こっていたことを再認識したようだった。その後、新仙台火力発電所、仙台市ガス局港工場、安養寺配水所などの被害状況の写真を提示し、同時に5万分の1の「仙台」の地形図を渡し、当時のインフラの状況から仙台市内でライフラインが不通になった原因をとらえさせた。また、公共交通機関の不通状況により震災当日に附属中学校での帰宅状況を思い出させながら、交通や道路網の重要性について関心を持たせ、次時につなげた。

第2時の学習内容として、災害時以外における仙台市内の交通渋滞の現状および仙台市内の主要な道路網についてとらえさせるように授業を組み立てた。導入として、前回生徒に渡した5万分の1の地形図に主要な道路網を記入させた。その後、仙台市の朝の通勤・通学時間帯における交通渋滞の現状について、特定の場所で激しい交通渋滞が発生していることを資料を読み取らせながらとらえさせた。多くの生徒が渋滞に巻き込まれた経験をもってはいたが、あらためて地形図に記入してみると、仙台の主要幹線道路を確認しながら仙台の道路の状況について確認できていたようである。

第3時の学習内容として、仙台市の交差点交通量調査の結果を基にしながら、仙台市内の交通渋滞に関する特徴についてとらえさせるように授業を組み立てた。

前回作図した地図を使い渋滞の現状について特徴を考えさせた。生徒は自分の住んでいる近くの場所にも渋滞箇所があることで興味を持ちながら授業を受けていた。また、昭和町交差点・ガス局前交差点や八幡神社入り口交差点といくつかの渋滞が特に激しい交差点に絞り確認を行った。生徒たちは交通渋滞場所で時間帯によって交通量が多い方向に変化があることに気づき疑問をもったようだった。

第4時の学習内容として、仙台市内の交通渋滞の原因について、住宅地の開発や都市構造と関連づけながら授業を組み立てた。前回の渋滞箇所を記した地図を使いながら確認を行った。多くの生徒は通学や通勤による人の移動が関係していることを捉えることができていた。導入として60年前の5万分の1の仙台の地形図と現在の地形図を生徒に配布した。生徒は60年前の地形図を見ることは初めてであり強い興味や関心を持っていた。現在と60年前の地図を比較させることによって、郊外の住宅地と旧市街地との結びつきを考えさせた。その際に住宅地の年代別のできかたについても説明を加えた。生徒の反応は郊外の新興住宅地から市街中心部への出入り口が渋滞の特定場所に限定されており、住宅地のできかたが交通渋滞を引き起こしているのではないかと考え出す生徒も何人か出てきていた。また、仙台市営バスの路線図の資料を読み取らせることによって、北仙台付近および五橋付近にバス路線が集まっている原因について、自然的な地形の特徴に着目するとともに、そのこととも関連させながら城下町という歴史的な都市構造の視点から気付く生徒も出てきた。

第5、6時の学習内容として、仙台市や宮城県が取り組んでいる交通政策について、ハードな側面とソフトな側面との両面から総合的に進めている事業を捉えさせる授業を組み立てた。導入として、現在工事をしている県道仙台・大衡線の北山トンネルの写真を提示した。仙台市がハード面からいろいろな道路の整備に取り組んでいる様子を確認させた。また、宮城県警察交通管制センターにおける交通管制システムについて資料を読み取ることを通して確認させた。その際に、宮城県警察交通管制センターが交通渋滞の状況を把握し、そのデータに基づいて信号機の制御や渋滞情報の提供などを行っているというソフトな面から交通渋滞の解消に取り組んでいることに着目させた。生徒はハー

ド面とソフト面とのそれぞれについて、仙台市や宮城県さらには宮城県警察の取り組みに気づき、その取り組みの意義について考えだしていた。その後、他の政令指定都市との車の依存度の違いに関する資料を提示し、仙台市が過度に自家用車に依存している交通体系であること、および仙台市がそうした状況を改善しようとして交通プランを策定したことを知らせた。そこで生徒は、上記したハード面やソフト面とは別な第3の交通政策の存在に気付くとともに、そうした視点からも交通渋滞の解消に何が必要であるか考えはじめている様子だった。

第7、8時の学習内容として、仙台市や宮城県が取り組もうとしている交通政策の有効性と問題点について考え、今後における仙台市の交通政策についてグループで考え、話し合いの中で自分の考えをしっかりと発言していく授業を組み立てた。生徒たちは話し合いの中でそれぞれの問題点について、その原因がどこにあるのかに着目しながら解決策を意欲的に考えていたようだった。特に身近な地域ということもあり、どの生徒も積極的に活動に取り組んでいた。また、班ごとに自分たちの考えを発表させ、それぞれについて重要度の視点から優先順位を考えさせた。当初は社会参加活動として仙台市役所の担当者へ自分たちの意見を提言するという予定であった。こうした社会参加活動を取り入れることによって、生徒一人一人が市民としてよりよい地域社会の形成に参画し、その発展に努力しようとする態度を育てていくことをねらっていた。ただなかなか意見がまとまらない面があり、後に総合学習などの時間を活用し、提出していこうということであったん終了した。

本単元を終えて、身近な地域の調査で、身近な地域における諸事象を取り上げ、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めて地域の課題を見いだし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養うとともに、市町村の地域調査の視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身につけさせたいと考えた。また、60年前の地図と現在の地図を見せることにより生徒たちは見たことが無かった過去の地図で仙台の旧市街地の様子を確認できたことでとても興味関心が高まった。そのことが、地図を有効に活用しながら、事象間の関係を説明したり、社会的事象の持つ意味・意義について自分の解釈を加えて論述し

たり、意見を交換したりするなどの学習活動を充実させることにつながったものと思われる。さらに実践を重ね、より深い学びの実現に向けて検討を進めていきたい。

#### 4. 本試案の成果と課題 ― 結びにかえて

今後、中学校での社会科授業を改善していくにあたって、本試案の成果として、次の三点を上げておきたい。まず、第一点目としては、「社会参画」の視点を取り入れたことによって、公民的資質の基礎を養うという中学校社会科教育が究極のねらいとして掲げている教科目標の実現に迫ることができたことである。すなわち、確かな社会認識の形成を基礎におきながら、それらを活用することによって「社会参画力」といった公民的資質の育成を可能にしていた指導計画であったといえるだろう。

第二点目は、第一点目とも関連するが、生徒の主体的な学習活動を促し、課題を解決する能力を一層培うことに配慮しながら、単元全体の指導過程を構造的に設計しようと試みていることである。探究型の学習としての「適切な課題を設けて行う学習」については、従来あまり実践されてこなかった状況がある中で、ひとつのモデルを示し得ているのではないだろうか。

第三点目としては、言語活動の充実を図ることに留意して、読図や作図といった作業的な学習活動を積極的に取り入れるとともに、読み取った事実を活用しながら、説明や解釈といった学習活動についても意図的に取り入れようと試みていることである。さらに、こうした思考力、判断力の育成に加えて、学習の成果を他者に向けて発信していくといった表現力の育成を視野に入れながら、各種の学習活動を取り入れていることも本試案の特徴といえる。

最後に、本試案の実践を通して見えてきた課題について、簡単にふれておきたい。ひとつは、授業時数の確保の問題である。中学校現場では、習得した知識、概念や技能を活用するための学習活動を充実させるための授業時間の確保がなかなか難しい状況にあるのが現実である。もうひとつは、教師の教材研究に関する負担の問題である。教科書を離れて、独自の教材を開発していくことは大切であるが、教師個人の努力には限界がある。やはり、校内あるいは地区の社会科教師

の間での共同研究を模索していく必要があるのではないだろうか。

#### 付 記

本稿の執筆については、1、2、4を主に松岡が担当し、3を主に佐藤が担当した。なお、本共同研究を進めるにあたっては、「はじめに」の部分でも記したように、本稿の二人の執筆者の他に、地理学研究者として小金澤孝昭教授（人文地理学）、西城潔教授（自然地理学）、並びに附属中学校社会科研究部の渡邊淳一教諭（現在は山元町立坂元中学校教諭）、浦邊盛勝教諭の4名にもご協力をいただいた。この場を借りて、お礼申し上げたい。

#### 文 献

- 岩田一彦（1991）『小学校社会科の授業設計』東京書籍  
 岩田一彦（1993）『小学校社会科の授業分析』東京書籍  
 内海巖（1975）「社会認識と市民的資質の形成——社会科教育の本質をめぐって——」（『社会科教育学研究』第1集、明治図書）  
 大友秀明・桐谷正信・西尾真治・宮澤好春（2007）「市民社会組織との協働によるシティズンシップ教育の実践——桶川市立加納中学校の選択教科「社会」の事例——」（『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第6号）  
 片上宗二（1994）「社会認識と市民的資質」（社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』明治図書）  
 唐木清志（2006）「社会科における社会参加学習の展開」（日本社会科教育学会編『新時代を拓く社会科の挑戦』第一学習社）  
 唐木清志・寺本誠（2007）「中学社会・公民的分野におけるサービズ・ラーニング実践」（『中等社会科教育研究』第26号）  
 唐木清志（2008）『子どもの社会参加と社会科教育』東洋館出版社  
 唐木清志・西村公孝・藤原孝章（2010）『社会参画と社会科教育の創造』学文社  
 唐木清志・藤井聡編著（2011）『モビリティ・マネジメント教育』東洋館出版社  
 小原友行（1991）「知識の構造と社会科授業構成理論」（『社会科の授業理論と実際』研秀出版）  
 小原友行（1994）「社会科における意思決定」（社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』明治図書）  
 中央教育審議会（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及

中学校社会科地理的分野における「身近な地域」の学習

び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）

松岡尚敏（2009）「平成20年版学習指導要領と社会科授業改善の視点」（『宮城教育大学紀要』第43巻）

松岡尚敏（2010）「平成20年版学習指導要領と社会科授業改善の視点（2）」（『宮城教育大学紀要』第44巻）

モビリティ・マネジメント教育 教育宣言検討委員会（2010）『モビリティ・マネジメント教育のすすめ－持続可能な社会のための交通環境学習』交通エコロジー・モビリティ財団

森分孝治（1978）『社会科授業構成の理論と方法』明治図書

森分孝治（2001）「市民的資質育成における社会科教育——合理的意思決定——」（『社会系教科教育学研究』第13号）

文部科学省（2008a）『中学校学習指導要領』東山書房

文部科学省（2008b）『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版

（平成24年9月28日受理）